

までと比べ割合長い滞在であったが、学生時代最後の巡検として思い出深いものとなった。

(10月1日～4日 浅海教官指導)

## 富 士 巡 検

山 崎 敦 子

1年の筑波以来、私達にとって久しぶりの巡検であった。現在不況の中におかれている製紙業についての実態を探る—というテーマを中心にすえ、7月19日私達は静岡県富士市へと向かった。巡検の要領をいささか忘れかけていた私(達)にとっては、地理科であることを再び目覚めさせてくれたといえる2泊3日であった。

7月19日午前9時30分、富士駅に集合。外に一步踏み出すと何か異様なにおいを感じたが、これは製紙工場によるものだと後でわかり、富士市＝「製紙の町」ということを身をもって認識したのであった。まずは市役所で富士市の概況を伺った。商業については年間販売額を他市と比べてみても、伸び悩みの傾向にあるという。これに対し、紙の出荷額全国一を誇る静岡県の中でも、富士市には多くの工場が集中し、全国一の「製紙の町」を形成しているとのことだった。この地域における製紙の歴史は古く鎌倉時代までさかのぼる。その原因として、良質な水に恵まれていること、原料の木材が近辺に豊富なこと、大市場(東京や大阪など)に近いこと—があげられる。第二次大戦後、特に高度成長期に製紙業が急速に発達した。が、1973年、80年という二度のオイルショック以降景気は低迷して今に至っている。従って生産をより伸ばすこと、また富士山の保全(環境問題)が今後の重要な課題である。以上のような話を聞いた後、市役所の御厚意によるマイクロバスで駿河工業用水道事務所へ。製紙業には莫大な水を必要とし、それまで利用してきた地下水だけでは地盤沈下などの支障を来すため、地下水を制限、かわって工業用水需要が著しく高まったということだった。水の浄化設備を見学したが、幾重にも仕切られた通路を経ることで水がきれいになっていくの

が不思議でならなかった。昼食をとった後、小林製作所へと移動した。研究開発によって独自の新技术を生み出し、海外輸出、技術提携と積極的な姿勢がうかがわれ、さすがは製紙機械メーカーのトップだけあって私達に対する態度も誇らしげな感じであった。この日最後は田子の浦港管理事務所。製紙の原料となるパルプやチップ、石油やセメントを移入、移出は河川による砂利が半分以上を占めているそうだ。夕方近かったせいか、港には活気がなく、もの寂しい気がした。こうして1日目の日程を無事終える。

20日、この日は1日大手製紙業社—大昭和製紙鈴川工場、大王製紙、新富士製紙—を見て回った。細かいチップが厚い板のような粗野なパルプ材となり、それが何度もプレスされて紙になっていく工程、また紙を綿状にしてからナブキンという製品ができて上がる過程を実際に見学できたのは大変興味深かった。製紙工場は24時間営業であるため、電気消費量が非常に多いと聞き、町全体が製紙のサイクルに忙しく合わされているような感じもった。市内バスにて帰途につく。

21日、午前中は茶業試験場及び茶業農家を訪れた。静岡と言えばお茶で有名だが、全国的な茶の増殖による産地間の競争に対応し、品種改良、栽培の省力化などを研究、実施しているそうである。やはり茶業の拠点地として品質の良いものを作りたい。午後からは富士宮市内の浅間神社へと向かった。あいにく雨にたたられた上、3日間の疲れがたまっていたのか、神主さんのお話の時は頭をコックリしている人も結構いた。その後は解散、皆ほっとした表情で列車に乗ったのであった。

今回の巡検は富士市という一地域にスポットを

あて、その中心産業である製紙業を主に見て来た。全国的な不況にみまわれている製紙業とはいえ、富士市においてはまだまだ衰えてはいない。各企業が独自の開発を進め、生産の向上を目指して努力している姿勢は、私達にも大変丁寧かつ熱

心に説明してくれたことでもわかったような気がする。ジュースやおしぼり、帰りにはお土産までいただいた。

(7月19日～21日 内藤教官指導)

## 山 梨 巡 検

神 山 直 子

「勝沼におけるブドウ栽培」を中心テーマにして、三上教官指導の宿泊巡検が行われた。10月3日のことである。初めての宿泊巡検ということでみんな緊張して高尾から電車に乗った。

中央本線の笹子トンネルをぬけると、勝沼付近の山麓から平坦部へかけて一面にブドウ園のすばらしい景観がひらけた。さすがにブドウ王国だと感嘆した。

まず、山梨市にある果樹試験場に行ってブドウ栽培のお話をうかがった。果樹栽培には気象条件が大切であるということ、山梨県がその中のブドウ栽培の条件を特に満たしているということ、ブドウの品種のことなどである。興味を持ったのは、現在ブドウの木が多くがウィルス病にかかっており、それを駆除するのが当面の課題で、試験場が中心になって取り組んでいるという点だ。

万力公園で昼食をとったあとの加納岩農協へ行った。この農協はモモが取扱量の85—90%を占めているため、モモ栽培について話をうかがった。先の果樹試験場が科学的な立場から果樹栽培を見つめているのに対し、農協は農家側に立って考えている。たとえば、栽培品種、木の植え換え時期や栽培法などの指導は個々の農家の事情に合わせて行われる。出荷が共撰方式のため当然といえば当然だが、日頃農協とは無縁の生活を送っている私達には驚きだった。

そのあとサントネージュワイン工場を見学し、ワインの醸造工程を自分の目で見た。しかし、こ

こでの私たちの楽しみが見学後のワイン試飲だったことはいうまでもない。気分がよくなったところで、勝沼にある宿泊所「ブドウの丘センター」へ向かった。

2日目は勝沼農協へ行ってブドウ栽培のお話をうかがった。ここでも、農協が農家に援助している仕事の内容について聞いたが、特に興味深かったのはブドウ栽培農家が現在直面している問題である。最近では山梨以外の県でもブドウを栽培しているため、市場では供給過剰の傾向にある。そのうえ、農家1戸あたりの栽培面積が約55アールと経営規模が小さく、収入が伸び悩んでいる。そのため、他地域に比してまだ割合が少ないとはいえ、兼業化が進んでいる。そうすると今度は農家に働き手が少なくなり、ブドウ栽培がおろそかになり、生活は依然として苦しい。このように農家は一種のジレンマにかかっているようだ。また、交通機関が発達したことを利用して観光ブドウ園に切り換えたところもある。この場合、継続的に客が来るように一定価格で品種のよいものを売りさばくということが課題になっている。

そのあと観光ブドウ農家に行ってお話をうかがった。農協での話と同じ内容だったが特記したいのは、後継者育成がウィルス除去と並んだ大きな問題である点である。ブドウ狩りを楽しんだあと農家の人の苦勞に感謝し、これからのブドウ栽培の厳しい状況を考えながら帰途についたのだった。

(10月3日～4日 三上教官指導)